

君に永遠の愛を 2

目次

君に永遠の愛を 2

5

番外編 君と歩く未来へ

201

君に永遠の愛を 2

——もう絶対にこの手を離さない。

米田侑依は、ある取引先のパーティーで、誰もが見とれる素敵なお人——西塔冬季と出会った。お互いが一目で恋に落ち、出会って半年後には結婚。

大好きな人との生活に、迷いも不安もなかった。

その時の侑依は、たとえ何があってもずっと彼の傍にいたいと思っていた。

——だからまさか、たった半年で離婚することになるなど思いもしなかった。

若くして大企業の顧問弁護士を務める冬季は、端正な容姿もあって非常にモテる。

それは、結婚する前からわかっていただけけれど、彼の周りにいる女性たちを見るたびに、侑依は気が気じゃなかった。

どんなに冬季のことを信じていても、彼が好きだからこそ耐えられなくなってしまった。ずっと傍にいたいという約束を、守れなくなるほどに——

けれど彼は、離婚した後度も度々侑依に会いに来て、真摯な言葉で変わらない気持ちを伝えてくれた。

好きだ、愛している——

そう言われるたびに、もう離婚しているのだから、と意地を張る頑なな心が解けていく。

当然だ。自分だってまだ彼を愛しているのだから。

もちろん侑依の中で、冬季を傷付けてしまった後悔と反省は消えない。

それでも、お互いの中に唯一無二の変わらぬ思いがあるのなら……

自分の心に素直になつて、もう一度、彼と一緒に生きて行こうと決めた。

そのために解決しなければならぬことはたくさんあるけれど、冬季とやらどんなことでも乗り越えていける。そんな風に思えるようになった。

そうして侑依は、冬季に乞われるまま再び彼と一緒に暮らし始めるのだった。

侑依は、現在住むアパートから冬季のマンションへ引越すため、荷物の整理をしていた。引越しの業者が来るのはもう明後日だ。

今住んでいるアパートは、あらかじめ一定期間賃貸契約をすることで家賃が安くなっていた。まだ契約期間が残っている状態で引越す場合、当然、違約金が発生する。

それもあって、すぐに一緒に暮らそうと言ってくれた冬季に、額くことができなかつたのだ。

彼は、アパートの契約は自分がどうにでもしてやると言ってくれたが、まさか本当になんとかなるとは思っていなかつた。

彼が不動産会社とどんな交渉をしたのかわからないが、結果的に違約金は発生せず、ハウスクリーニングと鍵の交換費用で済んだ。

どうして違約金を支払わなくて済んだのか冬季に尋ねると、彼はなんでもないのであるように答えた。

『重要事項説明書と賃貸契約書に記載されていたことが曖昧だつた。違約金の支払い義務があるとも明記されていなかったしね。それに、君は契約時に特約の説明をされていなかったように思う。

サインがない書類があつた。……侑依、いくら敷金礼金がタダだとしても、あんなずさんな契約をしている業者を選ぶなんて、ちよつとどうかと思うぞ』

心底呆れた様子で言われて、侑依は思わず頬を膨らませた。

あまりにストレートすぎる彼の言葉に、ちよつとした口論になる。

『急いで住む場所を確保する必要があつたんだから、しょうがないでしょう！』

『君がつまらない意地を張るからこうなる』  
冬季の言葉を思い出すとムカツとするけれど、彼の言うことはいつも正しくて侑依はぐうの音も出ない。

黙り込む侑依を見て、彼はほら見るとばかりに不敵に微笑むのだ。

そんな冬季に悔しさを覚えつつも、どんな顔をしてもしイイ男はカッコイイ、と思ってしまうのだからどうしようもない。

侑依はため息をついて、テレビや冷蔵庫といった家財道具に目をやる。

冬季と離婚してから新しく揃えたものだが、これらをどうするか頭を悩ませていた。

「向こうには、去年新調した大きな冷蔵庫があるし、こんな小さいテーブルなんか必要ないくらい立派なテーブルもある。本当は床に座るのが好きだけど、あの部屋に座布団は似合わないし……どうしようかな」

とりあえず、必要ないものは処分しなければ、とキッチンの小さな冷蔵庫を見る。

しかし、限られた予算の中で、かなり吟味して購入しただけに、処分するには思い切りがいった。「あの時は、とにかく冬季さんから早く離れようと必死だったし……生活を立て直すまで、結構大変だったんだよね」

狭いワンルームを見渡して、侑依は半年ほど前のことを思い出す。

離婚届を出した後、何も考えずに家を出てしまい、しばらくはネットカフェにいた。

それからどうにか自分の条件に合うアパートを探し出し、保証人になつてもらうため両親に頭を下げに行ったのだ。

そこで冬季と離婚したことを伝えると、呆れられ怒られ勝手にしろと突き放された。

なんとかアパートの保証人にはなつてもらえたが、あれ以降、両親とは疎遠になっている。

父には、もう家に帰って来るなと言われた。

「お父さん、怒ると怖いからな……。これも、冬季さんと復縁するためには解決しなきゃいけない問題だよね……」

これから先のことを考えると、気が重くなる。

冬季と復縁を約束したけれど、そのためには考えること、やるべきことがたくさんある。

そして、それと同じくらい問題もたくさんあった。

自分が招いたこととはいえ、離婚が周囲に与える影響を改めて思い知る。

侑依はバカなことをした。誰より大切な人を傷付け、たくさんの人に迷惑をかけた。

だけど、彼と離れたからこそ、気付けたことも確かにある。

どんなにすれ違つても、自分にとつて、冬季が誰より大切だとわかつたのだから。

だから侑依は、もう一度、彼といることを選べた。

やることも問題もたくさんあるけれど、再び彼と一緒にいるために、きちんとそれらを乗り越えていかなければならないのだ。

侑依は気持ちを切り替えるために大きく深呼吸して、引っ越し作業を再開した。

服は全て段ボールの中に片付けたので、あとは持つて行ってもらうだけだ。

もともと持つてきたものは少なかつたし、ものも増やさなかつたので、引っ越しといっても荷物は最低限しかない。

そこでふと、彼と結婚した時のことを思い出す。

冬季は侑依にプロポーズをした直後、今の広いマンションを購入した。事前に何の相談もなかつたので、本当にびっくりした。

いくら結婚するからつて新しく購入しなくても……と、当時は面食らつたものだ。

「でも、それだけ私との結婚を、真剣に考えてくれていたつてことだよね」

引つ越した当初は、こんなに贅沢ぜいたくでいいのだろうかと思つた。でも、キッチンの広さや部屋の間取りなど、侑依が居心地よく過ごせるよう細部まで考えられたものだった。

あんなに忙しい人が、二人で暮らすためにいろいろと考えてくれたのだと思うと、堪たまらなく嬉しかったのを覚えている。

「……はあ、ヤバいな、思い出しただけでもドキドキする」

冬季の愛情深さは、結婚していた時より今の方がよくわかる。

不器用で言葉が足りないながらも、彼なりにきちんと侑依と向き合い、大事にしてくれる。

侑依は目を閉じ、肩で大きく呼吸をした。

大好きな人が、自分を好きだと言ってくれる。

この奇跡のような幸せを、もう二度と手放してはいけない。

「冬季さん、大好き」

離れた後も変わることのなかった気持ちを、そつとつぶやく。

侑依がやってしまったことは消えないけれど、もう一度二人の未来を取り戻すために、冬季への愛を心に深く誓うのだった。

\* \* \*

引つ越しは自分も手伝うと冬季から言われ、彼が休みの土曜日にマンションへ荷物を運んだ。

「思っていたよりも少ないな」

荷解きをしていた冬季が、侑依の荷物を見回して言った。

マンションには寝室の他に三つの部屋とやや広めの書斎がある。

以前は、三つある部屋の一つを侑依が使い、書斎を冬季が使っていた。とりあえず、前に使っていた部屋に荷物を運び込んだところだ。

ちなみに残り二つの部屋は、一つには来客用としてマットレスを置いてあるが、どちらもほぼ遊ばせたままになっている。

「電化製品はほとんど処分してきたしね。あまりものを増やさなかったっていうのもあるけど」

一年の間に、引つ越しを三回した。

一回目は結婚した時、二回目は離婚した時、そして今回が三回目だ。これだけやれば、自然と荷物は整理されるし、本当に必要なものだけになってくる。

「このテレビは部屋に置くのか？」

ほとんどの家電は処分したが、テレビだけは持ってきた。小さいテレビだが、あのアパートでは充分なサイズだったし、なんとなく捨てるのは忍びなかったのだ。

「一人で観るなら、それくらいがちょうどいいから」

「一緒に観ないのか？」

マンションの居間には六十五インチの大きなテレビが置いてある。

初めて見た時は、あまりの大きさに目を丸くしたものだ。今となってはすっかり見慣れてしまった。むしろ、他のテレビを見ると小さいと思ってしまうくらい。

慣れとは怖いものだ。

「冬季さんが観たい番組と、私の観たい番組が別な時もあるでしょう？　結婚してた頃に、そういうことあったし」

冬季はそこで瞬きをして、ため息をついた。

「観たい番組があるなら言えばよかったんだ」

「でも冬季さんは、意味もなく観ていた番組でなかったでしょう？　なのにチャンネルを変えて、なんて言えないし。でも今度は、私が部屋に行くから大丈夫」

侑依は小さなテレビ台にテレビを置くと、電源とアンテナケーブルを繋いだ。

それから一緒に持ってきたブルーレイレコーダーの配線を始めるが、わからなくなつて首を傾

げる。

「侑依、テレビアンテナの繋ぎ方はそうじゃない」

侑依の横に座つた冬季は、慣れた様子でさっさと配線を済ませてしまう。

そうして彼は、隣に座つた侑依をジッと見て口を開いた。

「観たい番組があるなら、これからは言ってくれ。それですれ違いになつたりしたら困る」

そう言つて、彼は近くにあつた段ボールのガムテープを外した。

中身を確認して、黙々と取り出し始める。

「……困る、つて……そんなこと……」

こういうところが、彼は本当に不器用だと思つた。

侑依は観たいテレビ番組が重なつたくらいで怒つたりしない。

大体、観たいテレビ番組は、ちゃんと録画していた。リアルタイムで観たい番組もたまにはあつたけど、冬季の観る番組が嫌だつたことはない。

「誤解させたなら、違ふからね、冬季さん。テレビのチャンネルが重なることくらい、なんでもないから。ただ、もし観たい番組が重なつても、これからは部屋で観られると思つただけで。他意はないの」

侑依がそう言うと、冬季は静かに首を横に振つた。



「わかつてるさ。自分でも、こんな細<sup>こま</sup>かいことを気にする必要はないと頭ではわかっている。けど……僕は、もう君にあんな風に泣かれたくはないし、二度と手を離したくもない」

かつて、子供みたいにボロボロ泣いて彼に離婚を迫った侑依。

なんで、あんなことをしてしまったんだろう——本当に後悔することばかりだ。

侑依は、彼の心に消えない傷を残してしまった。

「もう、離れないよ」

大切な人を傷付けてしまった自分は、一生をかけてでもその傷を癒やしていきたいと思う。

今度こそ、何があっても二度と冬季から離れない。

「本当に？」

侑依の頬に大きな手が伸ばされる。

頬を包む温かさに頬ずりし、冬季を見つめて微笑んだ。

「約束したじゃない。今度こそ、どんなことがあっても、冬季さんの傍を離れないって」

「……侑依」

彼が顔を近づけてくるのを見て、侑依はそれを受け止める。

優しく重なった唇は、ゆっくりと侑依のそれを啄<sup>つば</sup>んで離れた。後には、冬季の唇の柔らかな感触

だけが残る。

「片付け、しないとね」

「そうだな」

少し俯<sup>うつむ</sup>いた侑依の頬を、彼がそっと親指で撫でてくる。

「片付け、終わらないから……」

「わかっているけど、離れがたいんだ。侑依はわかかって、いつも焦<sup>じ</sup>らすんだろう？」

「だって、ここでしちゃったら、時間食っちゃうじゃない」

彼の温もりから離れると、侑依は段ボール箱に入った荷物を取り出す。

箱の中身は、小説と料理の本、それから文具類だ。

以前使っていた木製の簡易机に置くと、後ろから抱きしめられる。

「この机、捨てないでいてくれてありがとう」

ここに忘れ物はもうないと思っていた。彼もまた、もう忘れ物はないと言っていたのに……

家を出る時、処分をお願いしたこの机を、彼は捨てずにいてくれた。

取っておいてくれた冬季の気持ちを考える。もしかしたら、彼は最初から侑依と復縁することを、

考えていたのかもしれない。

「君が帰ってくると思っていたから」

「本当に？」

「ああ」

彼が侑依の心を信じ、変わらぬ愛情を向けてくれたから、今こうして、侑依はこの場所に戻ってくる事ができたのだ。

「冬季さんの思いの深さには負けちゃう。……こんな風に愛されたら、私……もう冬季さんから離れられないよ」

「我ながらなんでこんなに、と思うよ。だけど、君ほど僕の心を動かす人間はいない。愛しているんだ、侑依」

そう言って抱きしめる腕に力を込めてくる。

侑依はその手に自分の手を重ねた。

「こんなことしてたら、今日中に片付け終わらないよ」

「ずっとここにいるなら、明日でもいいだろう？」

それもそうだ、と侑依は背後にいる彼を見る。

「でもここには……ソファもベッドもないけど？」

侑依がそう言うと、彼は抱きしめていた腕を解き侑依の手を取った。

「じゃあ、ベッドに行こう」

クツと手を軽く引つ張られただけで、侑依は彼の方へと引き寄せられてしまう。

手を引かれて寝室へ行き、抱き上げられてベッドに横たえられた。

冬季はすぐに侑依の足を広げながら組み敷いてきて、ブラウスのボタンを外し始める。剥き出しにした肩に触れ、背中に手を回してブラジャーのホックを外した。

「ゴムある？」

「一応」

そう言って手早く侑依の穿いているパンツを脱がし、ショーツへ手をかけてくる。

「一応、って……ちゃんと避妊するよね？」

「君の中に生で入れると気持ちいいから、どうしようか」

侑依を見つめて微笑んだ彼は、自分のパンツのボタンを外し、ジッパーを下げた。そして、シャツのボタンを外していく。

「して、ゴム」

シャツを脱いだ彼は、はぁ、とため息をついて侑依を見下ろす。

「わかった」

彼の唇が近づき、侑依は唇を開いて彼の舌を迎え入れた。

「……っは」

彼の大きな手が胸を揉み上げてくる。もう片方の手は足の付け根に伸ばされ、侑依の秘めた部分

に指を這わせてきた。

侑依の中から蜜が溢れてくるのを感じる。

隙間を撫でていた指が、その少し上にある尖った部分に触れた。と思った次の瞬間、きゅっと摘まれる。

「あっ……ん」

侑依が堪らず腰を揺らした時、どこかでスマホの着信音が聞こえた。

けたたましい音で、リリリリン、と音を立っている。

冬季はハッとしたように一瞬動きを止めた。けれど、すぐに何事もなかったみたいに侑依の中に指を一本入れてくる。

「冬季、さ……電話、鳴ってる」

「ああ」

先ほどから、スマホの着信音がまったく途切れない。さすがに、こうもずっと鳴り響いていると、気になってくる。

「ね、冬季さん？」

濡れた音を立てて、彼の指が侑依の中を出入りしていた。その間も、着信音は一向に鳴りやまない。

侑依は彼の指の動きに腰を揺らしながらも、心配になってくる。

以前も、土曜日に電話がかかってくるがあったが、大抵は仕事関係のものだった。

彼は弁護士なので、休日だろうと関係なく電話がかかってくることもある。

「仕事、じゃないの？」

冬季は指の動きを止め、ふう、と息を吐いた。そしてゆっくりと、侑依の隙間から指を引き抜く。「うるさい電話だ」

彼は渋々ベッドから下り、ティッシュで指を拭きながら寝室を出て行った。

聞こえてくる声から、やっぱり電話の内容は仕事関係だとわかる。

侑依はため息をついて起き上がり、ブラのホックを直してブラウスのボタンを留めていく。そして、片足に引っかかったままのショーツを引き上げた。

すると、明らかに濡れているソコから、小さな水音を立てて蜜が垂れてくる。

「あ……もう……」

侑依はティッシュを数枚引き抜き、自分の足の間に当てた。その時、物音が聞こえて寝室のドアを見る。そこには、入り口に寄りかかるようにして冬季が立っていた。

「すごく残念だよ、侑依……そんなエロい君を見て、続きがしたくて堪らないというのに、僕は仕事になった」

「……そう……」

濡れた隙間をティッシュで拭いてショーツを上げる。彼を見ると大きなため息をつかれた。

「君を抱くのは二週間ぶりだったのに……仕事だなんてツイてない」

そう言つて冬季は、寢室のクローゼットを開ける。そして着ていたシャツを脱ぎ、スーツへ着替え始めた。

彼の身体は相変わらずスタイルがよかった。しかし彼の下半身は、服の上からでもわかるくらい反応している。

「先にトイレに行った方がいいかもよ」

「侑依が抜いてくれたら、そんなことしなくていいんだが？」

ネクタイを結ぶ彼を見つめていた侑依は、おもむろにベッドから下りた。

彼の前に立つと、冬季のベルトを引っ張る。

「……ベッドに座つて冬季さん」

一瞬驚いた顔をした彼は、すぐにフツと笑つて素直にベッドに座つた。

「久しぶりだな、侑依にしてもらおうの」

「仕事行かなきゃいけないでしょ？」

侑依は床に膝をつき彼のベルトを外す。

どこか嬉しそうな彼を見上げて、躊躇いながらもスラックスのボタンを外した。

「しばらくしてないから、期待しないでね」

「ああ」

我ながら、どうしてコレをする気になったのか不思議に思う。冬季にしかしたことはないが、最初はすごく抵抗があった。

でも、彼がこのまま仕事に行くのは、いろいろと障りがあるから仕方がないのだ。

そう自分を納得させて、侑依はゆっくりスラックスのジッパーを下げる。すると、先ほどよりさらに興奮した彼のモノが目飛び込んできた。

下着をずらしただけで飛び出てくるそれを、侑依はそつと指先で撫でる。もう片方の手でティッシュを取つて準備していると掠れた声で名を呼ばれた。

「侑依」

行為を促すように、彼の大きな手が侑依の頬を撫でる。

侑依は唇を開き、彼の先端を軽く食む。それから舌で側面を撫でながら、口腔へ迎え入れた。

「……っ」

小さく漏れた吐息。口の中で冬季のモノが質量を増した気がした。

侑依は、歯を立てないように気を付けながら緩やかに唇を動かす。硬度が増すとともに、はつき

りと感じ入っている冬季の息遣いを感じる。

侑依は舌で唇で彼のモノを愛撫しつつ、冬季の足の付け根を撫でた。

彼は片方の手で侑依の頬を撫で、もう一方の手を髪の中に入れてくる。

「上手く、なったな」

そんなことを、色っぽい声で言われて嬉しくなる。

初めて彼のを口でした時は、かなりたどたどしかったと思う。けれど彼は、気持ちいいと言ってくれた。見ているだけで興奮すると。

侑依は、もっと彼に気持ちよくなってもらいたくなった。だから、本やネットで調べて、少しずつ舌の動きを大胆にしていき、今に至る。

上手くなったかどうか自分ではわからないが、彼がそう言うのならよかったと思う。

裏筋を舐め上げ、先端を吸ってもう一度唇の中に迎え入れると、冬季の腹筋が締まったのがわかった。

見上げると、気持ちよさそうな表情の冬季がいた。

目を閉じ、少しだけ呼吸が速くなり、侑依の頭を引き寄せてくる。

……侑依の唇で感じる冬季を見るのは、かなりの眼福。

眉を寄せた彼は、「はっ」と息を吐き、侑依の髪に指を絡めた。

「もう、イク……っ」

切羽詰まったような冬季と目が合う。その表情を見ただけで、侑依の下腹部が疼いた。

彼と繋がりたいという強い欲望が、侑依の中で渦巻き始める。けれど、それは叶わないのだと思うと、つい彼のモノに少しだけ歯を立ててしまった。

「侑依っ」

それが刺激になったようで、髪を掴む彼の手に力が入る。

侑依は冬季のモノから唇を離し、ティッシュを被せて指で擦った。

「……っ」

低く呻いた彼は自身を解放し、欲を吐き出した。

はあ、と色っぽく息を吐きながら冬季が髪を掻き上げる。

「……歯を、立てるな」

そう言っただけで見つめてくる視線に、侑依の中がキュッと疼く。

そして、自分でも濡れてきたのがわかった。

「まだ、硬い」

彼のモノに触れ、上下に扱く。

「イッたばかりだから……」

触れたからか、冬季自身が再び芯を持ち始める。それを見て、侑依の方が堪らなくなった。ベッドサイドの柵から避妊具を取り出し、無言でショーツを脱ぎ捨て彼の身体に乗り上げる。

「ちよっ……侑依……っ！」

冬季のモノを手で支えながら避妊具を被せ、自分の中に入れていく。

彼は唇を微かに開き、小さく声を上げた。

「仕事だと、言った……っ！」

眉を寄せ快感に耐える顔が、侑依の目に映る。それが酷く官能的で、侑依の中が無意識に締まる。お腹の奥でぐっつと質量を増していく冬季に、彼も感じているのだと伝わってきた。

「だって、私が……堪らなくなっちゃった、から」

はあ、と熱い息を吐いた彼が、腕時計を見た。

グツと眉を寄せた後、冬季が侑依の身体を強く抱きしめてくる。

「この……魔女が……」

そう言うなり、髪を強く引っ張られ噛みつくようなキスをされた。そのまま、ベッドへ押し倒される。

「着替え確定じゃないかつ」

彼は侑依の腰を両手で掴み、激しく身体を揺さぶり始めた。

「ごめんなさ……っあー！」

「つつたく、君は……っ」

まだ少し時間があると言った彼に、本当はもっともっと愛して欲しいと口に出せない思いを抱いた。

悪いと思いつつも、自分にしか見せない余裕のない冬季に、幸せな気持ちでいっぱいになる。気持ちよくて、イキそう。

短い時間の中、侑依は冬季と濃厚に愛し合うのだった。

「引っ越しは済んだのか？」

月曜日。出勤した侑依が事務所の机にバッグを置いたところで、坂峰優大さかみねゆうたが声をかけてくる。侑依の勤める坂峰製作所は、小さな町工場まちこうばながら高い技術力を武器に、国内外の幅広い企業と取引のある会社だった。

優大はその社長の息子である。

彼は侑依より早く出勤しており、出勤簿に判を押していた。

優大とは、入社当時こそいろいろ対立したが、今では気心の知れたよき友人、よき同僚といった関係を築いている。

侑依の離婚理由を知っている彼には、なんだかんだと心配や迷惑をかけているので、頭が上がらない。

口の悪いところもあるが、優大は大人で口が堅く、名前の通り優しい人だった。

バカみたいな理由で離婚した侑依を責めることはないが、チクチクと正論を言ってくるところに

も、実は感謝していた。

「おかげ様で。まだ全部は片付いてないけどね」

「まあ、引っ越しも三回目となると、いらぬものが無くなって早いだろうしな」

思わず言葉を詰まらせる侑依に、優大がフツと笑った。

「引っ越し好きだな、お前」

さらにグツとなり、侑依は彼を軽く睨にらんだ。

「事実だろ」

「……そうね、そうだわ」

引っ越しが好きなのではないが、回数だけなら確かに引っ越し魔とそう変わらないだろう。

「でもね、引っ越しはこれで最後だから。もう大丈夫」

「そうか」

優大はそれだけ言うと、笑って侑依の頭をポンポンと叩いた。

「いろいろ整理できてよかったな。ちゃんと幸せになれよ、侑依」

彼には、ずっと心配をかけていたと思う。結婚する時も、離婚する時も。

最初は反発し合って仲良くなかった彼が、まさかこんなにも自分にとって大きな存在になるとは思わなかった。

男だけど親友のような、そんな相手だと思っている。

さりげなく人を気遣える彼は、きつといろいろなタイミングを見計らって見守ったり、話しかけたりしてくれていたのだろう。

本当に彼には頭が上がらない、と侑依は心が温かくなるのを感じた。

「今度こそ、ちゃんと幸せになる。……いつもありがとう、優大」

「はいはい」

優大はそうおざなりな返事をして、席を立った。

「もう、何、その言い方」

「お前に説教垂れるのは、もう御免だからな」

彼はそう言って、侑依の頭を再度ポンポンと叩き、事務所を出て行った。

その背を見送り、侑依はパソコンを起動させる。

そして思い出すのは今朝のこと。

土曜日に仕事で呼び出された冬季は、日曜日にも仕事だった。夜遅くに帰ってきた彼は、疲れていたのかベッドに入るなり撃沈。

相変わらず忙しい人だと思いつながら、侑依も彼の隣で眠った。

そして今朝。目覚めた侑依の目の前に、珍しくまだ眠っている彼がいた。

ああ、また冬季と一緒に住み始めたのだ、と深い感慨とともに彼の寝顔を見つめっていると、冬季が目を覚ました。

まどろみの中、侑依を見てほんの少し微笑んだ彼の髪に、自然と手を伸ばす。

そうすると冬季はじつとこちらを見つめたまま口を開いた。

『朝の習慣が復活するの？』

その言葉にドキッとす。

結婚していた時、侑依は朝一番に彼の髪に触れていた。

彼の髪は癖がなく、手櫛で整えるだけで綺麗にまとまる。それを羨ましく思いながら、毎日冬季の髪の手を手で梳いていたのだ。

それをすると髪をセットしやすいうようで、彼の方から今日はしないのかと聞いてくるようになった。

それからずっと、侑依は朝起きて最初に冬季の髪の手を手で梳くのを日課としていたのだ。

侑依の手に自分の手を添えた冬季が、目を細めて『続けてくれ』と言った。

その表情がなんとも言えず優しく色っぽくて、侑依はドキドキしながら彼の髪の手を梳いた。

好きな人と暮らす日常が戻ってきたのを実感した。

毎朝、彼の髪の手に触れるという特別なコミュニケーションは、侑依だけのものだ。



何気ないこの時間が、胸がくすぐつたくなるほど幸せなのだ知った。なんで顔を赤くしているのかと聞かれて、素直にドキドキするからだと言えたら、朝から濃厚なキスをされて大変だった。

「はあ……」

これからはまた、あの朝を彼と迎えられるのだ。

そう思うと、嬉しい気持ち湧き上がってくる。この幸せのために、自分はもう迷ってはいけな  
いと心から思った。

大好きな冬季と、もう一度ともに歩く。

侑依は彼との未来に思いを馳せ、胸がいつぱいになるのを感じるのだった。

\* \* \*

仕事を終えマンションに帰ると、侑依の携帯に冬季から帰りが遅くなると連絡が入っていた。

「冬季さん、やっぱり忙しいんだなあ……」

復縁を約束してからは、時々彼のマンションに泊まるようになっていたが、夕飯を一緒に取れたのは数えるほどしかない。

「前に一緒に住んでいた時も、最初は寂しかったっけ」

——彼と一緒に住み始めたのは、入籍する少し前のこと。

引越した日は、熱い夜を過ごした。なのに、その翌日から帰りが遅くなり、ほとんどイチャイチャできなくなった。

もともと忙しい人だと知っていたけれど、同じ家において顔を見られないのはやっぱり寂しい。

侑依も女なので、好きな人には傍にいて欲しいとか、もっとラブラブしたいか思っていたので、すれ違いの日々にシユンとした記憶がある。

しかし、彼の仕事が一段落すると、一緒に婚姻届を提出しに行き、甘い日々がしばらく続いた。

「あれは、冬季さんの事務所が新婚だからって、配慮してくれたのかも……」

今も変わらず冬季の帰りは遅いが、侑依が起きている時間には帰ってくるし、夜も普通に身体の関係を求められたりする。

それこそ、お互い夢中になりすぎて、翌日眠気を引きずって仕事をする羽目になるくらい。

「まあ、でも、不思議と不安はなかつたりするんだよね……」

意地を張ったせいで回り道をしたが、こうしてまた一緒に暮らしている。

だからなのか、寂しいのは寂しいが、不安を感じるほどではなかった。

今思えば、可愛くないことをたくさんしてしまったな、と反省するばかり。

もともと意地っ張りな性格だけど、あんなにも彼に意地を張ってしまったのは、もしかすると寂しさや不安の裏返しだったのかもしれない。

そんなことを考えながら、侑依は一人分の夕食を作り始めた。

手早くキノコたっぷりのクリームソースを作り、買ってきたニョッキをゆでる。

サラダはカップに入った出来合いのものを買ってきた。

簡単な夕食を済ませて、お風呂に入ることにする。

一人だと湯を張るのがもつたいたなく思えて、シャワーで軽く済ませた。髪の毛をタオルドライで乾かしつつ、リビングのソファでブーツとする。

手持無沙汰で、侑依はテレビのスイッチを入れた。

久しぶりに見る大画面テレビの迫力に、目がチカチカする。

「……優大も大画面のテレビを買ったって言うてたし、男の人は大きい方が好きなのか？」

侑依は、アパートから持ち込んだ小さいサイズのテレビがちようどいいと思った。

適当にチャンネルを回しながら、しばらく大画面の映像を眺める。しかし、最近ほとんどテレビを見ていなかったせいか、何を見ても面白く感じない。

侑依はため息をついて、テレビを消した。そして、まだ濡れている髪の毛を乾かすために、ソファから立ち上がる。

洗面台へ行ってから、自分のドライヤーを持ってくるのを忘れたと気付いた。引き返そうと思つて、ふと広い鏡台の一角にドライヤーが置いてあるのが目に入る。

「これ、結婚した時に買った冬季さんのだ……お店で値段見たら意外と高くてびっくりしたっけ……でも風が心地よかつたんだよね……」

綺麗に片付けてあるドライヤーをじっと見て、少し考える。

そして侑依は、おもむろに冬季のドライヤーを手に取りスイッチを入れた。

「わ、やっぱり違う。凄くいい感じ」

風の当たりが柔らかいのに、きちんと乾くのがいい。侑依が持ってきたドライヤーは特売で買った安ものだ。髪さえ乾けばいいや、とリーズナブルなものを揃えたのだが。

「やっぱりお金をかけると、違うんだなあ……」

しみじみとつぶやきながら、侑依は目を閉じて髪の毛を乾かす。

「お金をかければいいってもんじゃないだろう」

その時、後ろから声をかけられて、びっくりして目を開く。

振り返ると、スーツを着た冬季が洗面所の入り口に立っていた。彼は無言で、侑依に近づくとその手からドライヤーを奪う。

「乾かしてあげるよ」

「だ、大丈夫だから」

「君は、髪を乾かすのが下手だ」

ムツと、眉を寄せる侑依に構わず、冬季は温風を調節し侑依の髪を乾かし始める。確かに彼は、侑依より髪を乾かすのが上手だった。

初めて髪を乾かしてもらった時は、あまりの気持ちよさにうっとりしたものだ。

なのに、こういうことを異性にされたことがなかった侑依は、照れ臭さからつい生来の意地っ張りが顔を出し、もう絶対しないで、などと言ってしまった。

「今日はどうだった？」

「一日のこと？」

冬季に聞き返すと、鏡越しに頷くのが見えて、今日のことを思い返す。

「特に何もなかったよ？」

「坂峰が何か言ってこなかったか？」

ああ、と思つて侑依は笑う。

「なんか、優大にはいつも心配かけてるみたい」

「……そうか。例えば？」

「うーん、まあ、いろいろよ」

侑依がそう言つて微笑むと、冬季がムツとした顔を向けてくる。

「相変わらず、坂峰と仲がいいな」

凄く表情が変わるとかではないけれど、侑依には彼が不機嫌になったのがわかった。

そんな冬季に、侑依はどこかホツとしたような、嬉しいような気持ちになる。

ああこの人は、私のことが本当に好きなんだ、と実感できるからだ。

冬季の気持ちを確かめようとして優大の名前を出したわけではなかったけれど、侑依は自然と微笑んでいた。

「仲いいよ。だつて一緒に仕事をする仲間だしね。最初は衝突もしたけど、今はいろいろとわかり合える親友みたいなものだから」

「ああ、そう」

「またそんな素っ気ない返事……そつちこそ、千鶴さんと仲がいいじゃない。あんなに美人なのに、なんで彼女とくつつかなかつたの？」

千鶴というのは、冬季が働く比嘉法律事務所でパラリーガルをしている女性だ。

「大崎さんは同僚だろう」

硬い声で反論されたので、侑依も少し声を低くして言い返す。

「私だつて同じだよ。優大は同僚だし、一度もそんなこと考えたことない」

侑依の髪に触れ、乾いたのを確かめると冬季はドライヤーのスイッチを切った。それを適当に洗面台に置くと、侑依の身体を自分の方へと向けさせる。

「本当に？」

冬季は侑依を腕の中に閉じ込めるように、両手を洗面台について身体を近づけてくる。

「もう、近いよ……そっちが勝手にそう思ってるだけでしょ？」

軽く冬季の肩を押すがびくともしない。離れる気はないということだろう。

「僕も、大崎さんと付き合おうとは一度も考えたことがない」

「じゃあ、それでいいじゃない。それとも、なんでもないので嫉妬するほど、私のことが好きなの  
け？」

侑依が冗談めかしてそう言うと、冬季はいたって真面目な顔で頷いた。

「ああ、そうだ。君のことが好きだから、坂峰の存在は目の上の瘤こぶだね」

そのストレートすぎる言葉に、侑依は言葉が出なくなってしまう。

お互い同じ気持ちだから、こうしてまた一緒に暮らし始めた。

だから、こんなことで動じる必要はないし、顔を赤くすることもない。

でも、侑依の心臓は苦しいくらいに高鳴り、顔が熱くなってくる。

冬季はいつもこうしてまっすぐに気持ちを伝えてきた。

こちらが冗談みたいに言っても、彼はそうじゃなくて……

真面目で硬い人。ストレートな物言いをするから誤解されることもあるけど、本当は優しくて思  
いやりのある人だ。

こんな素敵な人がモテないはずがない。きっと彼は、その整った容姿だけでなく、内面が素晴ら  
しいからこそ、こんなにも人を惹きつけてしまうのだろう。

「私だって……冬季さんの周りにいる女の人は、いつだって目の上の瘤こぶ。でも、冬季さんが私だけ  
を見てくれてるって、ちゃんとわかってるから」

侑依は冬季の肩にそっと手を添えて、唇に触れるだけのキスをする。

そのまま彼の首に手を回し、抱きしめた。

「大好きよ、冬季さん。優大は友達で同僚。冬季さん以外に、私がこうする人はいないから」

彼が息を詰めたのがわかった。そして回した腕から、彼の体温が上がっていくのがわかる。

「本当に君は、いつも狡ずるい」

冬季は強く抱きしめ返した後、少し身体を離して侑依を洗面台に押し付ける。

瞬まばたきをして彼を見ると、彼の目は欲情の色を湛たえ、はっきりと侑依が欲しいと言っていた。

「僕は君に溺おぼれ切ってるから、どんなことがあっても結局は許してしまうし、いつだって欲しくて  
堪たまらなくなる」

冬季は侑依の唇を親指で開かせ、最初から濃厚なキスを仕掛けてきた。あつという間に舌を絡め取られ、強く吸われる。濡れた水音が耳に届き、侑依の欲望が引き出された。

「んっ……んふ」

脇腹を撫でていた彼の手が、寝間着の下から入り込み素肌を撫でる。それだけで身体が震え、腰の辺りが疼いてしまう。

下衣にも手が滑り込んできて、ショーツの中を探られた。

「……っあー！」

自ら唇を離し、侑依は声を出してしまふ。

「濡れるのが早いな、侑依」

クスツと笑った彼を軽く睨んで、ベルトの下に軽く触れる。

「そつちこそ……っん！」

冬季の前もすでに大きく反応していた。彼は指で侑依の隙間を撫でながら、敏感な尖った部分を摘まんでくる。

「もう入れても支障なさそうだ」

「支障って……ゴム、ないでしょ？」

もう、と思うのはこういう時。

彼の言葉はストリートで、事務的で、だからこそムツとする。なのに、いつも冬季の言葉に感じてしまう侑依は、Mなのかもと思ってしまふ。

せつかくシャワーしたのに、と次第に大きくなる水音に息を詰める。これはもうショーツを替えないといけない、と思うくらい布地が濡れていた。

「ゴムは、ないな」

そう言つて冬季が侑依に、啄むようなキスをする。

「君の中にも何もつけずに入れるのが、恐ろしく気持ちがいいと離婚してわかった」

彼は侑依の首筋にもキスをした。同時に、熱く蕩けた隙間に指を一本入れてくる。

思わず腰を揺らすと、耳元で彼が笑った。

「僕を待っているようだな、侑依」

「あ……だって、そんな風に触るから……っ」

首に回した手が滑り落ち、彼のスーツの襟を掴む。

冬季とは、行為の際はいつも避妊していた。

侑依は彼と結婚した時、どうして避妊するのかと聞いたことがある。そうしたら、『まだ出会って短いから、もう少し二人でいたい』と言われた。

「まだ二人がいいんじゃないの？」

「もう、二人でも三人でもいいかと思って」

それは、これからの夫婦としての未来を考えているということだろうか。

「いいの？」

「君は今日、危険日だろう？ 早く入れさせてくれ」

そう言つて彼は、侑依の寝間着の下を脱がせた。

すつかり濡ぬれてしまったショーツも一緒に下げる。少し足を浮かせて脱がせるのを手伝うと、そのまま腰を引き寄せられた。

彼がベルトを外し、スラックスの前を開く。

下着をずらすと反応しきつた彼のモノが出てきた。

その大きさを見て、無意識に息を呑む。

冬季は位置を調整すると、一気に侑依の中へ自身を押し入れてきた。

「あっ……う」

急な圧迫感に、息を詰める。

けれどすぐに馴染なじむのがわかっているの、侑依はゆつくりと息を吐き出した。

「悪い、いきなりすぎたか？」

「……っん、だいじょうぶ」

彼を見上げると、とても気持ちよさそうな顔をしていた。

侑依を見る目が凄くセクシーで、何かを耐えるように眉を寄せるのが堪たまなく腰にくる。

無意識に腰を揺らす侑依に、彼は吐息とともに微笑み、さらに身体を押し付けてきた。

「君の中、温かくて、狭くて……気持ちいい」

その言葉に身体の奥がキュツとなるのを感じた。

彼は小さく息を吐き出し、ゆつくりと律動を始める。

「これだと、すぐにイキそうだ……」

微かに笑つて、彼は少しずつ動きを速くしていく。

「私も……冬季さん、帰つてこないから……ちよつと、寂しかった……」

心の中も、身体の中も、もつと冬季でいっぱいにしてほしい。

もう二度と、あんな馬鹿なことを考えないように、侑依の全てを愛して欲しかった。

「悪かった。でも、寂しかったのは僕も同じだ」

冬季は侑依を抱き上げ、洗面台に座らせる。

「あっ！」

彼のモノが抜けそうになったと思ったら、一気に最奥さいむちまで突き入れられた。

たちまち指先まで痺れるような快感が駆け巡る。

彼が動いたときに、洗面所に濡れた音が響く。

服の上から胸を揉み上げていた彼は、焦れた様子で寝間着をたくし上げ直接肌に触れてくる。

「好きだ、侑依、愛してる」

そう言ってキスをしてくる。深いキスを受け入れながら、彼の大きなモノで身体の内側をいっぱいにされて、本当に堪らない。

でももっと満たして欲しいと思うのは、きっと侑依が欲張りだからだ。

「……っとうごいて」

もつと侑依に、冬季の熱を打ち付けてほしい。

後から思い出して凄く恥ずかしくなるだろうけれど、今はただ彼から与えられる快感に酔いしれていたかった。

彼を引き寄せるように、腰に足を絡ませる。

冬季との結合がより深くなって、侑依は快感に身体を震わせながら喘ぎ声を上げた。

「言われなくても……っ」

彼はより動きを激しくし、侑依の中を愛する。

洗面台の鏡に背中がつくほど強く彼に覆いかぶさられた時、これ以上ないほど嬉しくて気持ちよ

かった。

再び冬季と一緒に住み始めてのセックス。

明日の仕事に響くと頭で思いながらも、侑依は彼の広い背中に手を回すのだった。

侑依が冬季と暮らし始めてそろそろ一ヶ月という頃。

いつも通り朝食の席についたところで、いきなり冬季から旅行に行こうと言われた。

「は？」

思わず聞き返すと、彼は首を傾げつつ同じ言葉を口にする。

「旅行に行かないか、侑依」

こういう時、淡々と同じ内容を繰り返すところは相変わらずだ。

「なんでまた、急に？」

「まとまった休みが取れそうなんだ。二泊三日と言わず、三泊してもいいな。近場なら海外に行ってもいい」

冬季が朝食の卵焼きをテーブルに置き、侑依の前の席につく。

今日は彼が朝食を作ってくれたのだ。

薄切りの雑穀パンと焼いた厚切りハムが一枚、そして卵焼きとミニサラダ。

いつも彼は、パンの時も卵をスクランブルエッグではなく、卵焼きにする。

その理由は、ホテルのようなスクランブルエッグにできないから、ということらしい。

「そうなんだ……でも、急じゃない？ そんなにまとまった休みが取れるなんて」

卵焼きに箸はしを入れながら尋ねる。

「ちようど、大きな仕事の一つ落ち着いたからな。仕事が一段落したら、まとまった休みを取るよ  
うに言われているから」

「そうなのね、知らなかった」

「以前は、君とそういう話をあまりしなかったからね。話す時間もなかったし。でもこれからは、  
もっと自分のことを話すようにするよ」

そう言っで静かにコーヒーを飲む彼を、新鮮な気持ちで見つめる。

確かに、以前一緒に住んでいた時は、彼と会社や仕事の話をほとんどしたことがなかった。弁護  
士という仕事柄、彼に話せないことが多いのはわかっている。

それでも、互いの休みや会社の諸事情については、もっと知っているべきだった。

結婚して半年も一緒に暮らしていたのに、お互いにまだ知らないことがたくさんある。

それを残念に思った。

「……うん。坂峰製作所ではね、納期が近い時以外だったら、自由に有休を取っていいの。夏休み



とは別に、三日から四日くらいの連休を、年に二回取るように社長から言われてるんだ」  
「そうか」

パンを頬張ると、冬季が笑いながら侑依の口元に手を伸ばし、パンくずを払ってくれる。

「もっと早く、いろいろ話していたらよかったな」

「そうね……もっと、話していたらよかったのに、しなかったね」

それどころか、短い結婚生活のほぼ半分を、ほとんど会話もなく過ごしていた。

本当に、なんでもつたないことをしたのだろう。

「これからは、もっとこうやって、いろんなことを話していきたいね。……さすがに、結婚も離婚も早すぎたし」

侑依が俯くと、冬季は伸ばした手で侑依の顎を持ち上げ、綺麗に微笑んだ。

「離婚は早すぎたが、結婚は早すぎたとは思わない」

そうして彼は、侑依の頬を一度撫でてから手を離す。

「今でも僕は、結婚はお互いにとつていいタイミングだったと思っている。好きな相手が傍にるのは最高だと、侑依も思っていたらどう？」

侑依は冬季の言葉に胸が熱くなった。

そうだ。確かにあの時、侑依もそう思った。

冬季がずっと傍にいる、ずっと一緒にいてくれる——

それが本当に幸せで嬉しくて、毎日結婚指輪を眺めて暮らした。

「そうね、そうだった」

再び自分の指に戻された結婚指輪を見て、侑依は微笑む。

「どこに行きたいか考えておいてくれ。新婚旅行では行けなかったから、海外に行くのもいいと思うている」

「海外かあ……行ったことない」

「そうだったな」

新婚旅行の行き先について相談し合った時、外国へ行ったことがないと話したことがあった。

でも結局、新婚旅行は急遽決めた北海道となり、しかも大雪で身動きが取れなくなるという経験をした。

あれはあれで、とてもいい思い出だ。

思い出すと今でも顔が熱くなるほど、冬季と濃密に抱き合った時間だった。

「僕はどこでもいいんだが、温泉もいいな、と思ってる。君も行きたいところがあったら言ってくれ」

「温泉か……いいね。今はペンションでも温泉の付いているところがあるし……少しいい旅館だっ

たら内風呂も付いてると思うし、いいかも」

すでに行くのが決まったみたいに話している。

こんなに幸せで本当にいいのかなと思うところはあ。

けれど、せつかく再び冬季と一緒に暮らし始めたのだから、少しくらい恋人らしいことをしてもいいだろう。

侑依は目の前の冬季に向かって微笑んだ。

「なんかもう、がぜん行く気になってきた……楽しみ！」

「当然、僕は旅行に行くつもりだ。きっと君より、僕の方が楽しみにしていると思う」

冬季はこうして、侑依の気分をよくしてくれる言葉を口にする。

生来の意地っ張りが顔を出し、素直に気持ちを口にするのを躊躇ためらってしまいが、自分だって本当に凄く楽しみにしているのだ。いつだって上手うまく言えないのは自分の方。

だけど……

「うん、楽しみ」

侑依はそれだけ答える。抑えようとしても、どうにも顔が火照ほてってくる。

大好きな人が、侑依と一緒に旅行をするのが楽しみだと言ってくれた。

その言葉に、心臓が高鳴るのを止められなかった。

\*\*\*

冬季から旅行に行こうと言われたものの、なかなか行き先が決めきれなかった。

あれからすでに四日ほど経つが、未だにまったく思いつかない。

海外にはとても惹かれるけど、侑依はそもそもパスポートを持っていなかった。そのため、申請するところから始めなければならぬ。

彼のまとまった休みが近々だとすると、間に合わない可能性がある。

それに何より、どこに行きたいか考えれば考えるほど、場所が絞れなくなってしまった。

「はあ」

事務仕事の合間のため息をつく。危うく、数字の打ち込みを間違えそうになった。

まだ昼休みには早いですが、気分転換をしようと給湯室へ向かった。

もう少ししたら社長のだいすけ大輔が銀行から帰ってくる。

それに合わせて、コーヒーメーカーにコーヒーをセットした。

一緒に、お昼に飲む従業員用のお茶も確認する。しかし、給湯室に置いてあるやかんの中身は、空からだった。